

出エジプト記16章2-4、9-15節

エフェソの信徒への手紙4章17-25節

ヨハネによる福音書6章24-35節

聖餐式聖書日課B年の福音書は、基本的にマルコ福音書から選ばれます。しかし、8月にあたる4つの主日は、ヨハネ福音書からになっています。ヨハネ福音書からといっても、6章の一部（「聖書協会共同訳の区切りでは、22節から始まる小見出し「イエスは命のパン」の途中から、71節まで続く「永遠の命の言葉」の途中まで）のみを四回に分けて学びます。マルコ福音書でも省略している部分がありますから、この福音書の設定は、どのような意図によるものか、といつも疑問に思ってしまう。そのような中で本日の旧約聖書は、有名なマナについての物語です（「民数記」11章にも同じお話があります）。それゆえ、本日は、旧約日課を中心に学びたいと思います。

エジプトで奴隷状態であったイスラエルの民は、モーセに率いられてエジプトから脱出します。いわゆる「出エジプト」です。しかし、荒野に入るとすぐに不平を漏らし始めるのです。聖書日課は、2節からですが、1節には、「こうして、イスラエル人の全会衆はエリムをたち、エリムとシナイの間にあるシンの荒れ野に入った。それは、エジプトの地を出て、第二の月の十五日のことであった」とあり、本日の2節「イスラエル人の全会衆は荒れ野でモーセとアロンに向かって不平を言った」となりますから、荒野に入ってほぼすぐに不平を述べたようです。「出エジプト」の正確な経路を定めるのは困難ですが、この個所までは海辺の道を歩んでいました。16章に入り内陸の道に入ったのでしょうか。エジプトとイスラエルの間の内陸部は、何もない過酷な場所です。

彼らの不満の第一は、食べものについてでした。「私たちはエジプトの地で主の手にかかって死んでいればよかった。あのときは肉の鍋の前に座り、パンを満ち足りるまで食べていたのに、あなたがたは私たちをこの荒れ野に導き出して、この全会衆を飢えで死なせようとしています」（出エ16:3）。この個所は、本当に人間の弱さを示している箇所といえます。ただし、荒野の地形の過酷さを考えると、不満を持つのは当然とも思えます。

さて、そのようなイスラエルに対して、主なる神様は、モーセに「今、あなたがたのためにパンを天から降らせる。民は出て行って、毎日、一日分を集めなさい。これは彼らが私の律法に従って歩むかどうかを試すためである」と語ります。ここでは天からのパンとあり、マナという言葉ではありません（マナと名づけられるのは31節です）。主なる神様がパンを与えるのは、「彼らが私の律法に従って歩むかどうかを試すため」でした。聖書日課では5節が省略されていますので、その点が少しわかりにくいのですが、そこには「六日目に持ち帰ったものを整えると、日ごとに集める分の二倍になるだろう」とあります。6日目と二倍とは、その日だけお得ですということではなく、明らかに7日目の休み・安息日を前提としています。実際、聖書日課より少し後の23節では「そこでモーセは彼らに言った。「主が仰せになったことはこうである。『明日は安息の祝い、主の聖なる安息日である。焼くべきものは焼き、煮るべきものは煮、余ったもの

はすべて自分のために朝まで保存しておきなさい。』』とあります。ただし、十戒の授与は、もう少し後のお話ですから、お話の流れとしては整合性が取れません。それゆえ、「新共同訳」はおそらく「律法に従って」を「指示通りに」と訳したのでしょう。しかし、「律法に従って」の方が原文に忠実です（「口語訳」もそう訳していました）。ここでは、いろいろな意味で、主なる神様の指示にイスラエルの民が従うかが問われていると考えます。

6節から8節までは、モーセとアロンがイスラエルの民に語り掛ける箇所です。その部分は聖書日課では省略されていますが、「夕方にはあなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださる」と主なる神様が民の不満に伝えてくださることを告げます。ただし、「あなたがたが不平を言ったのは、私たちに向かってではなく、主に向かってなのだ」（8節）とあり、イスラエルの民は、目の前のモーセとアロンに不満を言ったつもりであったが、それは見えない主なる神様に対して不満を持ったことに他ならなかったことが告げられます。そのあとには、「さて夕方になると、うずらがやって来て宿営を覆い、朝になると、宿営の周りに露が降りた。降りた露が上がると、荒れ野の地表に薄く細かいものが、地の上の霜のようにうっすら積もっていた」（出エ 16:13-14）とうずらと露のようなものが与えられるお話が続くのですが、そこでは「イスラエルの人々はそれを見て、『これは何だろう』と互いに言った。彼らはそれが何か分からなかったのである。そこでモーセは彼らに言った。『これは、主があなたがたに食物として与えられたパンである』』となり（出エ 16:15）。この「これは何だろう」という部分のヘブライ語から「マナ」という名前が出来たと考えられます。

旧約日課は、ここで終わりますが、お話は続きます。民は、「誰もそれを翌朝まで残さないように」と言われたにもかかわらず、何人かは残してしまい、それが腐ってモーセに怒られます。今後の不安を解消するために、余った時は保存しておくのは、災害対策としては、正しい判断といえるのですが、「マナ」は、主なる神様がイスラエルを導くことの象徴です。大切なことは、人間的には不安に思っても、主なる神様を信じその指示に従うことなのです。

本日のお話しでは、イスラエルの民が主なる神様の指示通りに歩いていけば、問題は生じなかったといえます。しかし、その指示は、人間の考えを超えてと感じられる場合があります。あるいはいつでも何に対しても、その指示があるわけでもありません。人間は、主なる神様の指示通りに歩みたいと思っても、人間的な判断をしなければならないことも多いのです。だからこそ、他の信仰者とともに祈りながらあゆみことが大切なのですが、それでも失敗がある時、そのような人間には失敗と思えることが、未来を拓くための大切な歩みであったといえる場合もあります。そもそも「出エジプト」という出来事自体において、指導者モーセをはじめとして、その第一世代のほとんどは、カナンの地に入れませんでした。その意味では、人間的視点では失敗の計画であったと言えるのかもしれませんが、しかし、その失敗が未来につながり、主なる神様を信じるイスラエルの民を整えていきます。その意味では、人間の思いを超えた大切な失敗であったのです。わたしたちは、イエス様を通して、主なる神様を信じます。だからこそ、世界から悲しいことが一日も早くなくなることを願いつつ、わたしたちの歩みがよりよい未来を拓くと信じて歩み続けたいと思います。